

AUTOMOBILE
COUNCIL2020

東京都のコロナウイルス感染者数が初めて400人を超えた2020年7月31日、新型コロナウイルス感染拡大の影響でイベントの中止や自粛が相次ぐ中、幕張メッセにおいて「AUTOMOBILE COUNCIL2020」が開催された。イベント自体は、1990年代までに登



加藤哲也氏 (2019年)

文化を途切れさせたくない
加藤哲也氏のチャレンジ

ジャーナリスト

三木寛郎

場したヘリテージカーの展示会で、2016年にスタートし5回目を迎えるもので、今回は「CLASSIC MEETS MODERN」というフィロソフィーを掲げて世界から往年の名車や最新モデルが展示された。

開催に当たっては、同時入場数の制限、入場登録シートの提出、入口での体温チェックなど。万全の感染防止策を実施した上で開催にこぎつ

締役社長の加藤哲也氏に「ここまで来たら意地の開催ですね」と水を向けると、

「このイベントは単なる、懐古趣味の自動車の展示会ではなく、自動車文化を後世に伝えるという使命を自負しています。コロナ禍にある社会状況の中でも文化の継承を途絶えさせてはいけないという思いが開催を決定させました。オリンピックが延期され、使い手のいなくなった会場をもう一度甦せるという意図も含めて、ようやく開催にこぎつけました」と話してくれた。

「このイベントは単なる、懐古趣味の自動車の展示会ではなく、自動車文化を後世に伝えるという使命を自負しています。コロナ禍にある社会状況の中でも文化の継承を途絶えさせてはいけないという思いが開催を決定させました。オリンピックが延期され、使い手のいなくなった会場をもう一度甦せるという意図も含めて、ようやく開催にこぎつけました」と話してくれた。

存するWithコロナという動きが始まっており、加藤氏が語った、「どうせやるなら最初に」という言葉が耳に残った。

フェラーリとポルシェ、

紋章の「馬」

加藤氏のお話をうかがったあと、マスクをしながら「AUTOMOBILE COUNCIL2020」の会場を巡った。筆者などには高額の花とも思える高価なヒストリックカーや高級車が並ぶ中、ふと目に止まったのがエンブレム(紋章)である。

メルセデス・ベンツ、アルファ・ロメオ、フェラーリ、ポルシェ…世界の名車たちにはその伝統を伝えるマークが燦然と輝いているのだ。

例えば、フェラーリの「跳ね馬」だが、その馬のマークの下に「S・



「F」と記されているのをご存知だろうか。これは「スクーデリア・フェラーリ (Scuderia Ferrari)」の略であり、フェラーリの創業者である故エンツォ・フェラーリが若かりし頃アルファ・ロメオのドライバーとしてレースに参戦し、自らのチームを率いていたことに由来する。その後自らの名前を冠したマシンを制作し、1951年、フェラーリはイギリス・グランプリでアルファ・ロメオを破り初優勝を果たす。この時エンツォ・フェラーリが「私は母を殺してしまった」と語ったのは、あまりにも有名な逸話だ。

そのフェラーリの「跳ね馬」と同じ意匠がマークの中心に施されているのがボルシエである。

ボルシエの本拠地はドイツのシュトゥットガルト市である。シュトゥットガルトの意味は「馬の園」。

この市の紋章がボルシエのベースとなっているのだ。ボルシエの創業者であるフェルディナンド・ボルシエ博士はこの紋章とシュトゥットガルト市のあるバーデンビュルテンブルグ州の紋章を組み合わせてボルシエのエンブレムを作成したのだ。

時あたかも第1次世界大戦の折、「撃墜王」として名を馳せた伝説のパイロットのフランチェスコ・バラツカは敵対するドイツ空軍の飛行機を打ち落とすたびにドイツ空軍の基地があつたシュトゥットガルト市象徴である馬の紋章を自らの機体に記していったのだ。バラツカは1918年に戦死してしまうが、その両親がエンツォ・フェラーリに彼のシンボルであつた跳ね馬のエンブレムを授けたのだ。つまりフェラーリの「跳ね馬」とボルシエの馬は同じシュトゥットガルト市に由来するものなのである。

日本の自動車メーカー、その紋章は。

メルセデス・ベンツの「スリーポイントスター」、アルファ・ロ

メオの「十字架と蛇」、プジョーの「ライオン」、シトロエンの「ダブル・ヘリカル」、シボレーの「ボウタイ」、キャデラックの「アントワーヌ・デ・ラ・モース・キャデラックの家紋」など、世界の名立たる自動車メーカーのエンブレム(紋章)にはそれぞれに深遠なる「ものがたり」が刻まれているのだ。

翻って日本の自動車メーカーを見てみると、そのエンブレムのほとんどがメーカーのイニシャルを加工したものであることに気づく。かろうじてスバルと三菱は紋章であるが、トヨタも含めその起源がメーカー名の英文であることに驚かされる。

かつてカークラフィックの編集長だった故小林彰太郎氏とこのことについてお話をしたことがあつたが、小林氏はトヨタのエンブレムを「面長のカウボーイがテングガロンハットをかぶっている」と表現されたが、トヨタによれば「3つの楕円を左右対称に組み合わせ、楕円が持つふたつの中心点の1つがクルマのユーザー、もう1つがトヨタの心を示し、楕円の輪郭が、ふたつの心をつなぐ世界を表現している。内部の2つの

楕円の組み合わせはトヨタの「T」を表現すると同時に、ステアリングホイールに自動車そのものも意味している」とのことであるが、やはりTOYOTAの「T」なのであつた。

最近ではテレビなどを眺めていても軽佻浮薄なものが殆どで、知識と教養だの蘊蓄だのというものは影を潜めてしまっているが、そろそろ日本の自動車メーカーも世界に負けないうか。

そもそも日本には4000種類近くの「家紋」があり、馬印、旗印など無数の「紋章」が存在する国なのである。

1769年にフランスのニコラ・ジョゼフ・キュニヨールという軍人が蒸気で動く三輪自動車を発明してからおよそ250年、日本の紋章の歴史はもつと長く深いはずである。是非とも、日本の自動車メーカーが世界にアピールできるようなエンブレム(紋章)を掲げる日が来ることを望みたい。

新型コロナウイルス禍の下、幕張でヘリテージカーを見ながら、ふとそんなことを考えた。